

# グリエツィ

グリエツィ

vol. 28

2005年 新春号

編集 Intercultura A.NOJIMA

編集責任 Atsushi NOJIMA

連絡先 Bahnhofstrasse 71

CH-6460 Altdorf (スイス)

Tel/Fax +41 (0)41 870 27 28

E-mail: ap.nojima@bluewin.ch

http://mypage.bluewin.ch/gruezi/



スイスと日本を結ぶ生活情報・交流紙

(スイス・ドイツ語で「こんにちは」)

Schweizerisch-Japanische Zeitung

## 今から200年前に日本を訪れた最初のスイス人! ヨハン=カスパー・ホルナー

昨年の初夏、チューリッヒ大学附属民族博物館 Völkerkundemuseum der Universität Zürichで、若手研究者フィリップ・ダレーさんが、今から約200年前に、スイス人として初めて日本の地を踏んだヨハン=カスパー・ホルナーが描いた水彩画やスケッチのオリジナルを発見し、話題を呼んだ。フィリップ・ダレーさんは、同民族博物館に昨年4月から勤める研究者で、ビジュアル人類学を専門とし、長年アイヌについての研究を手がけている。

昨年、スイスと日本で、日瑞和親通商条約締結140年の記念行事が行われてきたが、このホルナーの水彩画、スケッチのオリジナル発見は、大きなインパクトを与え、10月ジョゼフ・ダイス連邦大統領（当時）の日本公式訪問の際には、ホルナーの原画の複製が日本側に寄贈された。さらに、今年予定されている愛知万博では、このホルナーが遺した水彩画やスケッチ、肖像画などがスイス館を飾る予定になっている。チューリッヒ大学附属民族博物館を訪ね、フィリップ・ダレーさんに話を聞いた。

### チューリッヒ出身のヨハン=カスパー・ホルナー

昨年10月、スイスのダイス連邦大統領（当時）が日本を公式訪問した際に、天皇と総理大臣に2枚の水彩画の複製が寄贈された。これらは、今から200年前に、日本に上陸した「最初のスイス人」ヨハン=カスパー・ホルナー（Johann Caspar Homér）が描いたものである。ロシア皇帝アレクサンダー1世の命を受け、クルーゼンシュテルン艦長率いる船が、1803年から1806年に掛けて、世界探検航海を取行した。この探検隊にスイス人のホルナーも科学者、地図製作者として参加したのである。チューリッヒ出身のホルナーは、ドイツで天文学を学んでいたが、師に進められ同探検隊に参加することになった。探検隊の主な目的は、行く先々の国との外交関係を樹立し、通商の可能性を探るもので、北海道を経由して日本にも寄港した。しかし、探検隊は、徳川時代の鎖国の壁に阻まれ、半年の交渉もむなしく、なんらの成果も得られず日本を離れた。ロシアへの帰国後、この探検隊が記録した寄港先の風土、風俗の記録（地形、動植物生態、人種タイプ、衣装など）や地図が銅板にされ、1810年にサンペテルスブルグで出版されている。

### アイヌ研究者のフィリップ・ダレーさんがオリジナルを発見

その中に、ホルナーの描いた地図や日本の風景なども紹介されていて、その存在は以前から知られていたが、オリジナルについては、ホルナーの死後、その行方が分からなくなっていた。ところが、昨年に入ってから、チューリッヒ大学附属民族博物館に勤めるフィリップ・ダレーさんが、同博物館に埋もれていた古文書の中から、ホルナーの遺した水彩画やスケッチなどのオリジナルを発見したのである。

ヌーシャテル出身のフィリップ・ダレーさんは、ビジュアル人類学を専攻し、写真や絵画、図像などの古文書をもとに、民族や人類について研究している。特に、アイヌについての研究を進めている。そして、2004年4月から、チューリッヒ大学附属民族博物館の助手として、チューリッヒで仕事をしている。

以前から、アイヌ問題を研究している関係から、ロシア探検隊が樺太、北海道にも近接しているのを知っていたダレーさんは、民族博物館で、関連資料を探していた。研究室に行く廊下の正面にヨハン=カスパー・ホルナーの肖像画が掛かっているのを、毎回見ながら、ロシア探検隊に参加してスケッチや記録を残したホルナーの資料が、チューリッヒ大学附属民族博物館内に眠っているのではないかと、探し始めた。そして、30年来博物館に勤める館長の協力を得ながら、ついに2004年6月にそのオリジナルを発見するに至ったのである。

現在まで分かっていることは、1836年にホルナーが死んだ後、ホルナーの妻が、肖像画と古文書類をチューリッヒの骨董商協会に寄贈した。その後、1888年にチューリッヒ大学附属民族博物館が創設され、コレクションが博物館図書館に保管された。その後しばらくは、研究者が部分的に資料を使ったりして散逸したものもあるが、次第にその存在その



ホルナーの肖像画

ものがほとんど忘れ去られてしまった状態になったようである。

チューリッヒ大学附属民族博物館で働き始めて、すぐの大発見にフィリップ・ダレーさんは、興奮した。ダレーさんは、ホルナーの遺した古文書や手紙類がもっと発見できると期待している。

ダレーさんは、昨年秋、このホルナーの描いた水彩やスケッチの発見について、日本の研究会で報告した。ホルナーは、しっかり記録に残った形で、日本に足を踏み入れた最初のスイス人と言える。今から200年前のことである。来年の愛知万博でも、この「発見」に焦点が当てられる予定だ。スイス館の入口にホルナーの肖像写真を掛ける企画が現在進んでいるという。

### スイスと日本の架け橋の仕事を引き続き

フィリップ・ダレーさんは、出身母体のヌーシャテルの民族博物館で引き続き仕事をしているが、ここには、1863年にスイス全権代表として、日本に赴き日瑞和親通商条約締結に成功したエメ・アンペール Aimé Humbert が日本から持ち帰った貴重な資料がほぼ手つかずで保存されているという。そして、日瑞通商条約締結150年の年には、この資料を整理し、大規模な記念展示会を企画したいと考えている。ダレーさんは、その準備責任者である。スイスと日本の交流史に大きな足跡を残す仕事となるであろう。

Völkerkundemuseum der Universität Zürich  
チューリッヒ大学附属民族博物館  
Department of Visual Anthropology  
Pelikanstrasse 40, 8001 Zürich  
Tel 01 634 90 26  
phil.dallais@vmz.unizh.ch  
www.musethno.unizh.ch



研究室で工作中的のフィリップ・ダレーさん